

## 桓武天皇と「造都」

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



平安神宮外拝殿 (明治28年に平安宮大極殿を模して約8分の5の規模で建設された)

日本の伝統として、宮都を移転するときには必ず天皇によって遷都宣言が出されます。神武天皇じんむてんのうの橿原宮かしのらのみや以来、明治天皇の東京にいたるまで60箇所ほどの宮都が確認できますが、それらはいずれも遷都宣言をともなしたはずです。もちろん神武天皇は実在とはふつうは考えられておらず、したがってその宮都もあるはずはないということになり、また東京遷都では宣言は出されていませんが、今はその議論は置いておきます。

遷都の宣言は天皇によってなされるので、叙述としては「某々天皇が都を造った」ということになりませんが、では実際天皇は、はた

して造都にどの程度関与したのでしょうか。これがよく分からない、というよりも造都という工程は事務部門なり建設部門なりがあたるため、いかに当時の政権の頂点にいるからといって天皇がいちいち現場に口出しすることはないと考えるのが常識的でしょう。

平安京から百年ほど前、天武天皇てんむてんのうは熱心に宮都の建設を考えました。未曾有の内乱の壬申じんしんの乱を平定し、真に安定した国家・社会を造ろうとした天武天皇が、新たな時代の新たな宮都を持つとするのは当然ともいえますが、天武天皇11年(682)3月、「新城にいぎ」を新都の場所と定め、自身でその地の視

察にあたっています。結局は、遷都することはなかったので造都過程への具体的関与は知ることができませんが、同12年には複都制ふくとせい(中国の長安・洛陽ちやうあん らくやうのように複数の宮都を持つこと)採用の「詔みことり」を発したり、また13年には「畿内きない」や信濃しなの(長野県)に使節を派遣して宮都の地を調査させてもいます。熱心といったのはこのことで、かなり細かに宮都建設に関わったことは推定してもよさそうです。

さて、桓武天皇かんむてんのうの平安京の場合はどうでしょうか。

市内六角堂ろっかくどうの境内に臍石へそいしと呼ぶ石があります。ヘソのように中心が窪み、何かの礎石だったのでし



発掘調査で見つかった西堀川跡（左）と朝堂院宣政門の階段（右）

ようが、これには伝承があります。平安京の工事にかかり、道路を敷設しようとしたところ、<sup>しょうとくたいし</sup>聖徳太子が建立した六角堂が道路の中心になり、どうしても六角小路が敷設できない。これを知った桓武天皇は「勅」を出してその場所を立ち退いてほしいといったところ、たちまち5丈ほど退き、無事道路を通すことができたと伝わっています。臍石はその建物の礎石ということになります。また、羅城門の建設中、視察に訪れた桓武天皇は工人に少し低くするように命じました。後日訪れて低くしたことを

後悔したと伝えられています。ともに荒唐無稽に近い伝承の世界に属するものの、桓武天皇が深く宮都の造営に関与したことを物語っています。

史実としても桓武天皇は平安京の造営に関与しています。『続日本紀』に、延暦14年(795)8月、工事の行なわれている朝堂院に足を運び、「<sup>しょうさく</sup>匠作」をみたとあります。工人たちの現場を視察しているわけで、具体的な指示内容は不明ですが、何らかの指示が天皇から出されたと考えるほうが自然なように思われます。

また『日本後紀』には、延暦18年6月、京内を巡行中に堀川あた

りを通りかかりました。堀川は文字通りに掘削した人工の運河で、その工事にあたる人々に混じって「<sup>かんさ</sup>鉗鎖の囚徒」、つまり刑具を付けられたまま四人が労働させられているのを見かけ、それを解放してやったともあります。

この二つはともに史実であり、天皇として強い意欲をもって桓武天皇が平安京の建設にあたったことが分かります。これは他の天皇にはほとんど見られないことであり、天皇本人が造都にどう関わったかということを考えるうえで興味深いものがあります。(井上満郎)

参考書籍：井上満郎著『桓武天皇と平安京』（吉川弘文館発行）



六角堂（上）と臍石（下）



羅城門造営状況のジオラマ（模型 京都府京都文化博物館蔵）